

北海道から沖縄まで(6/2~8/29) 3ヵ月間 全国35ヵ所の7188名(※現更に拡大中)

日刊 動労千葉

86. 8. 30
No. 2335

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五六(公衆)〇四七二二七二〇七

沖縄・連続
全回23弾

「俺たちは鉄路に生きる」沖縄上映会は、八月七日・名護市での北部上映会(名護市民会館)を皮切りに、八日・中部(沖縄市民社会福祉センター)、十一日・宮古(平良市協栄生命ホール)、十二日・八重山(石垣市電通)、十三日・南部(那覇市NTT会館)で開催され、各上映会に先だつ試写会(六日那覇市教育福祉会館)も含め、総計二五〇名の参加者で大成功をおさめた。

沖縄各地で二五〇名結集

沖縄上映会は、各地域の労働者がそれぞれ主体的な独自の実行委員会をつくりきわめて精力的に準備運営された。

動労千葉の二波のストライキは、沖縄の労働者にも衝撃をあたえ、映画の作成・上映運動開始の報に「ぜひ沖縄でもやろう」「成功させよう」という気運が労働者の中に自然と生まれ、全電通・自治

労・全駐労・教組、それに各地域で住民運動を担う人々で実行委がつくられ、ピラも沖縄独自のものが五千枚、主要職場に労働者達の手によりまかれ、ポスターも一三〇枚が貼り出された。

約一カ月の準備活動の後、八月四日には動労千葉から後藤・千葉支部特別執行委員が来沖し、沖縄の労働者とともに労働組合や職場を積極的にまわって協力を訴えるとともに、動労千葉と沖縄労働運動との交流連帯を深めた。

上映会は、各会場とも写しだされる労働者のたたかいに「全軍労働争のころを



後藤・千葉支部特別執行委員を招き、6/2~13 沖縄各地6ヵ所での「鉄路に生きる」上映会がもたらした

北海道
全回22弾

スクリーンに喰い入る―上映後、動労千葉(中村千葉支部青年部長)と宮島監督を囲んで討論・交流会―

十八時十五分、司会者の挨拶によつて北海道での第一弾としての函館上映会が開催され、九〇名の参加者により圧倒的な成功をかちとつた。

北の地で交通労働者同士の熱い連帯に感動

まず、上映実行委員会を代表して、大西敏氏が「偏狭なセクト主義的対応を克服し、今こそ真に国鉄分割・民営化を阻止する力を結集しよう」とよびかけ、動労千葉のスト決起を支援しようとして訴えた。

続いて、大きな拍手の中、宮島監督が紹介され、宮島氏は「これは動労千葉の生の声である。闘う労働者の真の姿である。参加された皆さんは、今日の労働運動が忘れかけているものをこの中から学

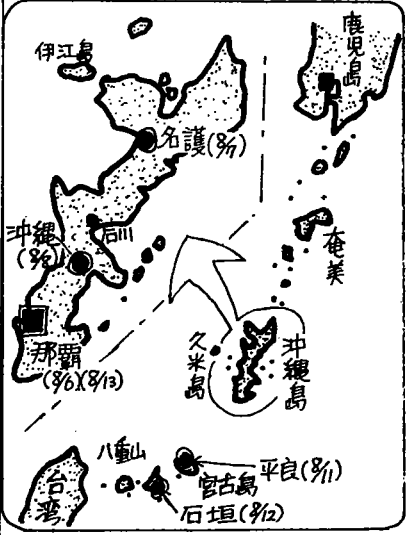
び取つていただければ幸いだ」と熱く訴えられた。

待ちに待った上映開始だ。全参加者は熱い視線をスクリーンに集中し、喰い入るように動労千葉の闘う姿に見入った。

フィルム交換の間、動労千葉の千葉支部・中村青年部長が紹介され、力強い言葉で国労が今こそ闘いに決起し、共に闘うことを熱烈に訴えた。

そして、参加した私鉄総連・函館バス労組の青年部より中村氏に配布が手渡された時は感動的であった。

上映終了後、司会者より「分割・民営攻撃は、国鉄労働者だけの問題ではない、



思い出した」「牧青のたたかいに似ている」という声が多く聞かれ、最も激しく燃えあがっていた頃の沖縄闘争の魂を呼び起こした。

上映会をはさんで各地で開かれた後藤氏と沖縄の労働者との交流会をとおして今後、もつと動労千葉と沖縄労働運動が学びあい高めあう連帯交流を深めていこうと確認し、八七年軍用地二十年強制使用、同年国体にまつわる天皇来沖、日の丸・君が代とのたたかいを国鉄闘争とともに中曾根を撃つたたかいはとして頑張っていくことを誓い合い、今後に大きな展望を拓いた。(寄稿・沖縄上映委員会)

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ!